

## 高等教育における授業研究：「総合演習」の授業実践

森光, 義昭  
近畿大学九州短期大学

<https://doi.org/10.15017/15658>

---

出版情報：教育経営学研究紀要. 10, pp.95-102, 2007-05-31. 九州大学大学院人間環境学府(教育学部門)教育経営学研究室/教育法制論研究室

バージョン：

権利関係：



## 高等教育における授業研究 —「総合演習」の授業実践—

森光 義昭

(近畿大学九州短期大学／教授)

- I. はじめに
- II. 高等学校における学習の現状
- III. 最近の高等教育に関する教育論
- IV. 総合演習の授業実践
- V. まとめ
- VI. 総合演習に関わる当面の課題

### I. はじめに

現代の若者は、共通試験（センター入試）が始まった頃から、学習に対する取り組みに以前とは異なった事象が現れ始めた。学習に対して、受動的であり、提出された学習課題に対しては積極的に取り組むという態度が見られる反面、それ以上に自らが進んで課題を設定してそれに取り組むという姿勢はあまり見られないようになった。一見真面目に取り組むが、一般的に消極的であり、自らが身体を通して行動することよりも、思考しながら学習課題（試験問題）を解くというような行動パターンを多く好む傾向が出てきた。

平成 10(1998)年に改定された学習指導要領は現代の児童・生徒の実態に対応していくために、「生きた学力」を中心課題に据え、児童・生徒が自ら課題を見つけ、その課題解決のための方法を探り、解決の活動力を身につけ、学習を主体的に受け止め、積極的な行動が取れるようにし、解決した事柄を生活の場で活用し、さらに応用していく力を身につけることが求められることになった。

そこで、教育現場ではこれらの考え方を前提にした新しい学習指導の在り方が推進されることになるが、これに対して教師は、児童・生徒が各自で設定した課題に対して、価値観の多様化に対応できる地球規模的な考え方が出来る資質・能力が求められる。現代の国際社会、情報社会、福祉社会に対して、どれだけの見識を持って、課題解決のための援助が出来るかが教師の力量として広く求められることになる。

そのことを踏まえて、これからの大学における授

業も教師養成の在り方として、従来から広く行われてきた講義式の授業から、大学生が主体的に学習に取り組むための授業改善が求められることになる。

### II. 高等学校における学習の現状

従来からの学校での学習は、児童・生徒にとって真の生きた学力になっていたのだろうか。ペーパーテストには強くなっても、日常生活において活用したり応用したりすることが出来るような学力にはなっていなかったのではないだろうか。学習指導が知識の暗記に偏り、進学のための効率のよい知識の伝達に力点が置かれていたように思われる。物事を判断するためには知識を得ておくことは重要なことであるが、知識が得られれば学習目標に到達したと評価しがちである。その知識が社会の変化に適應でき、応用する力になってこそ、真の学力と言えるのではないだろうか。これまでの学習の方法を考えると、与えようとしている知識は教師が一方的に準備したものを子供に伝えるという学習のスタイルであった。最近子供たちの学力が低下したと言う見方があるが、何を持って学力とみなしているのだろうか。最近の学習は課題解決学習的なスタイルに変化しつつあるが、評価の尺度は従来から行われてきた依然としてのペーパーテストによる評価で学力を見ている野ではないだろうか。ペーパーテストのみで評価する、時間数削減との関係と併せて、低下しているようにみえるのだろうか。ペーパーテストに現れる点数は真の学力ではないだろう。したがって、そのことからゆとり教育の見直し論も出てきているが、

真の学力を測定する手立てを確立してから、学力面で、どのようなことに効果があらわれているか、どのようなことに課題が出てきているかを分析してから、学習指導の在り方を検討しなければならないのではないだろうか。

ところで、現在も高等学校では、受験競争という社会現象に追われながら、学校教育も、保護者や生徒の要望にこたえる形で、知識のみの、それも入試科目に重点が置かれた学習指導になっていることが指摘されている。入試教科について、いかに効率よく問題の正解率を高めるかに力点が置かれ、総合学習が十分に行われていない実態が見えてくる。現在「総合演習」を履修している大学生のうち、平成 17 (2005) 年度の学生が高等学校で総合学習を履修している学生が 35%に過ぎず、新学習指導要領の移行期間であることも考慮しながらも、低い履修率になっている。それと比較する形で平成 18 (2006) 年度の学生の実態を見ると、総合学習の履修率は 83%になっている。したがって、「総合演習」の指導方法も学生の実態に照らし合わせて、昨年と本年では指導展開を変えて授業実践を試みた。

### III. 最近の高等教育に関する教育論

#### 1. 大学における教員養成論

平成 10(1998)年の教員免許法の改正により、従来からの授業科目の基準を維持しながら、「教職の意義等に関する科目」を新設し、教師の資質・能力の育成と向上を提言した。そのことから、教育職員養成審議会の答申と教育職員免許法の改正に伴って、平成 12(2000)年度から高等教育におけるカリキュラムの再編が行われた。これらの答申の方向性の一つに、教師自身が巨視的視野（グローバル・スタンダード）に立ったものの見方や考え方が出来るような資質や能力を備えることを求めている。そこで、高等教育における学習の在り方として、学習を主体的に捉えることが出来るようになるために、「総合演習」が教職課程科目の必修として位置づけられた。また、このことは、小学校、中学校、高等学校における「総合的な学習の時間」の指導力にも関わることになる。総合的な学習の時間は、教師自身が自主的な取り組みをしないと、学校としての推進を図ることは出来ないだろう。このことは学習していく子

供の立場から考えても、教師が自主的に一人一人の子供に具体的に関わることが一人一人の「子供への理解」につながり、子供一人一人への理解から、一人一人の子供のよりよき育ちをどのように支援していくのかを構想することが出来ることになる<sup>(1)</sup>。したがって、教員養成にあたって、現在の学生たちにこのような教育現場で適応できるための資質や能力を身につけておくことは重要なことであり、高等教育のカリキュラム編成が改めて重要な要員となる。

したがって、中教審が求める教師像にあるように、「家庭や地域社会との連携を進め、家庭や地域社会とともに子供たちを育成する開かれた学校をつくるために教師自身が開かれた心を持たなければならない。<sup>(2)</sup> これからの教師は教育問題のみならず、社会問題を幅広く、しかも専門的に深く捉えることが出来るような教師でなければならない。そのために大学における「総合演習」は社会に対して常に課題意識を持って対応できるような能力を身につけるための科目であると解釈すべきであろう。

#### 2. 教職教育科目カリキュラムの再編の背景

教育職員養成審議会（教養審）は平成 9(1997)年に第 1 次答申の中で、「教師の資質能力に関する要素」として、次の項目を挙げている。いつの時代も教員に求められる資質・能力として、教育者としての使命感、人間の成長・発達についての深い理解、幼児・児童・生徒に対する教育的愛情、教科等に関する専門的知識、広く豊かな教養と、これらを基盤にした実践的指導力を挙げている。また、今後特に教員に求められる具体的な資質・能力として、地球的視野に立って行動するための資質・能力、変化の時代を生きる社会人に求められる資質・能力、教員の職務から必然的に求められる資質・能力を挙げている。その中で、特に、これからの教師に求められる要素としては、常に物事を地球的視野に立ってみたり考えたりすることの出来る人間の育成を目指していると言えるだろう。そのような背景から、これからの大学における教職教育科目のカリキュラムの再編と特に指導方法の改善が求められていくことになるだろう。

#### 3. 教育職員養成審議会答申

##### (1) 社会の背景

産業技術の発展は大量の製品を作り出し、日常生

活に関わる衣食住に関した商品も、多種多様にいきなり、安価で、労することなく、自分が目的とした高品質な商品をたやすく手に入れることができるという状況である。現在の大学生が受けてきた義務教育は、高度経済成長時代の中にあり、社会一般は学校教育に対して、卒業したら即企業人として活躍できるような人材の育成を求めたため、本来の生きて働く真の学力を身に付けるということは出来なかったのではないだろうか。

## (2) 中教審答申と教育再生会議

第15期中央教育審議会は21世紀を展望した我が国の教育の在り方について、子供に「生きる力」と「ゆとり」を提言した。「生きる力」は学校・家庭・地域社会が相互に連携しつつ社会全体で育てていくものである。この教育理念の下で、現在まで、教育実践が行われてきたが、ゆとり教育に対する新たな考えが出てきた。それはゆとり教育が学力低下を招いたというのであるが、本当の学力とは何か、本当に学力は低下したのかという論議も出始めている。仮に学力が低下したとしても、学力低下の新しい原因がゆとり教育にあるのかという疑問も出てくる。そこで、最近では、平成19(2007)年1月教育再生会議は第1次教育再生会議報告の中で、「ゆとり教育」の見直しを提言した。その中で、基礎学力を強化する観点から授業時間数の10%増加、教科書の改善、学習指導要領の改訂、補修などを行う「土曜スクール」の実施、学校選択性の導入などをあげている。このような考え方もあるが、「生きた学力」を身に付けるという観点から考えると、最近取り組み始め軌道に乗りつつある「課題解決学習的」な学習方法は、全ての教育活動において積極的に取り入れ、子供たちの主体性を伸ばすための教育として、推進していかなければならないのではないだろうか。

## (3) 教師の資質・能力

現代のような複雑な構造を持った社会に対応していくためには、教師自身が広い視野に立って、幅広く物事を捉えることが出来る社会性を身につけることが求められる。答申では、「未来に生きる子供たちを育てる教員は、まず、地球や人類の在り方を自ら考えると共に培った幅広い視野を教育活動に積極的に生かすことが求められる」とし、また、「教員は変化の時代を生きる社会人に必要な資質・能力をも十分に兼ね備えていなければならない」と述べている。そこで、まず、「地球的視野に立って行動するための

資質・能力」では地球・国家・人間等に立って行動するための資質・能力を備えなければならない。そこには地球観、国家観、人間観を確立し、個人や社会人としての国家や地球との関係を適切に理解することが要求される。また、社会や集団の規範意識も持ち備えなければならない。さらに、豊かな人間性の面では人間尊重、人権尊重、思いやりの心、男女平等の考え方、社会に奉仕する精神を養うこと、さらに、国際社会で重要とされる基本的資質・能力としては、価値観の多様化に伴う考え方の違いを受容することや立場の違いを理解することと、変化の時代時生じてくる課題に対して、解決していく能力を身につけなければならないだろう。

## IV. 総合演習の授業実践

### 1. 研究のねらい

平成12(2000)年度より、小学校・中学校・高等学校に「総合的な学習の時間」が導入されたことに伴い、大学における教員免許状取得のための履修基準が改定された。大学では教職課程科目の一つとして「総合演習」が必修科目となり、第3学年での履修を標準としている。

そこで、本研究は大学における教職課程教育科目が必修となった、「総合演習」を平成17(2005)年度と平成18(2006)年度の取り組みを比較検討することにより、大学における「総合演習」のカリキュラムの編成の手がかりを得ることと、授業の在り方を模索してみたいと思って設定した。

### 2. 総合演習で養う教師像

教員免許状の法律が改正され、大学における「総合演習」の履修が免許状取得の条件となった。大学における教職教育科目の総合演習は小学校・中学校・高等学校の「総合的な学習の時間」(以降、本稿では「総合学習」と表記する。)の指導力のみを身につけることを前提にしたものではない。今、教師の資質・能力が問われている。教師としての資質面では教師と言う職業倫理観が十分に認識されていない。人が人を育てるとはどのようなことかということが十分に理解されていない。このことは、日本古来の伝統的な儒教に基づく教師観のみを指しているのではない。まずは教師としての使命は何かという自ら

の問いかけに対して、どのように応えることが出来るか、また、今の若者が現代の社会をどのように捉えているか、捉えることが出来るかという実態の把握力、さらに、全ての社会事象を、国際的・地球規模的・社会奉仕的な感覚で捉えることが出来る力を養うことにそのねらいがあるといえるだろう。

### 3. 学生の履修状況とテーマ設定の実態

総合演習の受講の学生は大学に入学して以来、3年次後期までに、それぞれの学部では次に示すような科目を主に履修している。そこで、今後の指導展開の在り方を模索する観点で、これまでに履修した科目の内容が、今回の研究テーマの設定作業において、どのように影響をしているのかを見る。

#### (1) 社会学系学部

研究主題の設定にあたって、学生は自分が所属している学部の分野を多く履修しているため、学部に関係した領域に興味・関心が集まり、研究に広がりを見ることが出来ないように思われる。社会学系の学部の学生のこれまでの履修状況は表1に示した科目であり、研究主題も表2の通り学生が履修して興味を持った科目に関係した内容を検討している。テーマについて考える時の動機は、以前授業を受けていた時疑問を持ち、興味をもったからということも挙げている。以降、他の学部のテーマ設定理由も、同じような傾向が見られる。以降、表中のパーセントは全て、複数回答による回答数の割合で算出している。

表1 社会学系の主な履修科目

学部・学科	履修科目
社会学系	「文化人類学」
	「社会心理学」
	「現代社会問題」
	「社会調査理論」
	「異文化理解」
	「現代若者心理学」
	「異文化」コミュニケーション
	「広告心理学」

表2 社会学系が設定した研究テーマ

テーマの領域	%
子供たちの特徴的実態	68
青少年の問題行動	83
自己愛と対人恐怖	31
マルチ商法	28
日本の伝統文化	77

#### (2) 人文学系学部

人文学系の学生は、表3の通り主として国語科又は外国語(英語科)の免許取得を目指してしている。この学部・学科の学生は本来より文学的な面への興味があり、これまでの授業で益々関心を寄せている。

表3 人文学系の主な履修科目

学部・学科	履修科目
人文学系	「社会言語学」
	「生活文化論」
	「文化人類学」
	「日本文化論」
	「ことばと文化」
	「日本文学」
	「欧米文学」
「アメリカ文化と英語」	

この系列の学部の学生は、「言葉」や「文章」に関する内容に以前から興味や特技を持って、学習に取り組んでおり、表4にあるように小学校に導入されている国際理解、異文化体験の一環としての英語教育に多くの学生が興味を持っている。

表4 人文学系が設定した研究テーマ

テーマの領域	%
小学校における英語教育	92
時代の変化と流行語	38
若者の言葉遣い	21
ファッションの移り変わり	78
若者の食生活	86

#### (3) 人間関係学系学部

この学部・学科は従来の家政学、教育学、工学の系列である。したがって、表5のように生活に関わるもの、文化に関わるもの、人間関係に関わるものを中心に履修している。したがって、教職課程の履

修の学生の中では最も教育の分野にも関心が広がっている。その点では総合学習で取り扱うテーマに多く共通していると見てよいのではないだろうか。

表5 人間学系の主な履修科目

学部・学科	履修科目
人間関係学系	「観光文化論」
	「生活文化論」
	「基礎デザイン論」
	「映像表現法」
	「人間学」
	「人間関係論」
	「生活のなかの科学」
「栄養と健康」	

表6 人間学系が設定した研究テーマ

テーマの領域	%
人の行動力と睡眠の関係	22
日本と外国の教育	78
世界から見た日本人	65
学校週五日制とゆとり教育	71
社会の変化と服装の変化	38

#### 4. 本年度の研究テーマの拡大

本年度の受講者は高等学校の時、83%が「総合学習」を履修しているのので、表7に示すとおり、研究テーマの設定について、学部・学科を越えてより幅広い分野での研究に取り組む力が身についている。高等学校の時に学習の経験がある学生の場合、社会に対して幅広い見方をする力が身についている。前年度は研究テーマの事例を提示しなければならない実態に合ったが、今年度は、これまでの経験を生かして、テーマ設定は自らの力で創造的に設定することが出来た。教師が例を与えると、その範疇から超えることが出来にくいのが、自由な発想で活動が出来たので、より学習目標に到達できたのではないだろうか。

表7 研究テーマの設定

領域	研究テーマ
	早期英語教育の課題
	テレビ番組が子供たちに与える影響
	日本と外国の教育制度の特徴

教育	若者の言葉遣いから見る日本語
	10年前と現在の子供たちの放課後
	日本の教育と各国の教育
	学校週五日制とゆとり教育
文化	平安時代の風俗と現代
	世界から見た日本人
	日本の伝統文化（歌舞伎・大相撲）
人間	子供の生活習慣
	自己愛傾向と対人恐怖の関係
	ヒトと睡眠の関係
	青少年犯罪の実態と背景
	コミュニケーション不足の課題
健康	現代の子供たちの食生活の乱れ
	子供の食生活と生活態度
	中学生のおしゃれに対する意識
	食事の摂取と生活態度の関係
	大豆の持っているパワー
環境	アニメにおける日本の住居
	地球の温暖化が与える影響
	資源の有効な活用方法
国際	外国の子供たち
	日本と外国の習慣の相違点
	外国の絵本

#### 5. 総合演習の指導展開の比較

##### (1) 平成17年度の授業計画

平成17年度の場合は、これまで（小学校・中学校・高等学校を通して）に、課題解決的な学習の経験者が少ないため、研究活動をどのようにしていけばよいかという見通しが十分に持てないでいる。そこで、授業の全体計画（シラバス）15時間のある程度、講義授業形態を前半に設定して授業を展開しなければならないと考え次のように設定した。

- ①課題解決学習・総合学習等の講義・5時間
- ②研究テーマの設定・・・・・・・・・・1時間
- ③研究班の編成・・・・・・・・・・1時間
- ④研究活動・・・・・・・・・・5時間
- ⑤研究発表会・・・・・・・・・・2時間
- ⑥研究活動の評価・・・・・・・・・・1時間

昨年度の学生は高等学校の教育課程が「総合学習」に関しては教育課程が移行期間であったため、高等学校の教育課程を踏まえて、大学の教育内容、方法、授業形態等を決定しなければならない。そこで、「高

等学校の3年生の時に総合的な学習の時間を履修していない生徒が83%いるので、ある程度小中高の「総合的何学習の時間についての講義や、課題解決学習の未経験と併せて、講義の時間を多く設定した。

この場合の計画で課題となったことは、演習の授業形態でありながら、「総合学習」を理解させるために、ある程度、説明のための講義に時間を費やしたために、本来の活動する時間を十分に取ることが出来なかった。学生も、授業に対する感想として、「時間がたりなかった」ことを挙げている。

## (2) 平成18年度の授業計画

それに対して、平成18年度は演習形態を中心に授業を設定した授業を行った。本来、本科目の授業形態は、「演習」形態である。したがって、学生が学習に対して課題意識を持って主体的に授業に臨むことを前提にした授業であるので、より望ましい学習計画を立てることが出来たのではないだろうか。この計画の場合、活動に時間が十分に取れたし、前年度のように計画の前半のように特別な説明をしなくても、既存の経験を基にすぐに活動に入ることが出来たので、学習上の支障は生じなかった。

- ①課題意識に対する調査・・・・・・・・・・1時間
- ②研究活動の取り組み・・・・・・・・・・1時間
- ③研究テーマ設定と研究班の編成・・1時間
- ④研究活動・講義・・・・・・・・・・9時間
- ⑤研究発表会・・・・・・・・・・2時間
- ⑥研究活動の評価・・・・・・・・・・1時間

## 6. 研究グループ（班）編成の手順

### (1) 教師主導によるグループ編成

これまで、学生は小学校から高等学校まで、学校が準備した教材を教師の主導で学習してきたので、「どんなことを研究したいか」と問われても、主体的学習に取り組むことには慣れていないのが実態である。前年度は研究テーマの設定も時間を要したので、各人がテーマを模造紙に一つずつ書いて、KJ法的に黒板に貼り付け、共通したテーマを一括りにして教師が主導してグループ編成を行った。本来の学生が主体的に活動するという観点から言えば多少課題が残る方法ではなかったのではないだろうか。学習経験の有無が、如何に重要な要素であるかということ問いかけているのではないだろうか。

### (2) 学生の互選によるリーダーの選出

本年度の場合、研究テーマが各個人から設定され

たため、昨年度に行った方法での研究班の編成はむしろ困難であった。テーマが多いので、まとめるのに時間を要した。そこで、研究グループを編成するためのリーダーの選出を行った。大学生の場合は、教職課程科目の履修者はある程度構成メンバーが固定されているので、スムーズに推薦者が現れた。そこで、まとめ役がある程度の共通したテーマを一括りにして、研究グループを希望によって編成した。この場合のメリットとして考えられることは、研究の構成員がお互いに人間関係が形成されている状態で編成されているので、研究活動がスムーズに行われたことが挙げられるのではないだろうか。グループ編成については学生の自主性を伸ばすためにも次年度からもこの方法が有効であると考えている。

## 7. 研究活動の方法

学生たちの研究課題の解決に当たっての方法等に学習の体験がある場合とそうでない場合では大きな差異が認められる。まず方法として多いのは、両年度とも情報媒体機器の普及に伴って、パソコンに慣れ親しんでいるため、パソコンによるインターネット検索の方法である。次に図書館での文献を探り、情報を得るとい活動が主となっている。この図書館での本探しは小学校以来諸々の機会に経験してきたことなので、特別な抵抗感や新鮮さは感じていない。しかし、特徴的なのは学習経験が豊富であると、アンケートによる調査を行ったり、現場に出かけて研究テーマに関わった内容についての聞き取り調査を行ったり、インタビューなどの活等を積極的に取り入れるなどが明確に現れている。

表8 研究方法の比較

研究の方法	H. 17	H. 18
インターネット検索をする	83	85
図書館で文献を探す	81	61
アンケート調査をする	35	83
現場での聞き取り調査	18	76
インタビューをする	11	65
実験をする	25	18
試作品をつくる	15	20
観察をする	66	78
担当教師に質問する	53	36
討論をする	23	33

### 8・研究活動の評価の方法と感想

学生の研究活動の時間を保証するために、全体の討議をとる時間が十分に取れなかった。また、活動は研究班ごとに分かれて行うために、全ての活動の状況を把握することは困難である。そこで、毎時間に「研究活動経過報告書」を作成し、そこには、本時の活動の予定（見通し）、本時で活動して解決できたこと、新たに疑問点が出てきたこと、研究をどのようにしたらよいか分からないこと、次の時間の活動内容の予定、質問事項、指導者への要望、指導者からのコメントの項目を設定し、毎時間の活動ごとに、記録係りがまとめて記述して提出を求めた。小中学校の教育現場ではポートフォリオの手法を使って実践されているが、大学における「総合演習」の場合でも、学生の研究活動の様子がよくわかり、この方法は有効であったと言えるのではないだろうか。

研究活動を行った後の感想としては、表9の通りであるが、割合多くの学生が研究テーマの決定に当たっては困難を感じたようである。また、今まではほとんど学校（教師）が準備したものを学習していたが、この時間は自分が学習したいものを選んで行ったので、意欲を持って学習に望むことが出来たようである。アンケート調査の項目の作成にあたっては、文章記述は作成するには楽であるが集計のときに大変であることも、実施した後に気づいて勉強になったと感想を述べている。このことも、経験が学習そのものであることを意味しているようである。現在の学生は4年次に卒業研究に取り組むことになるが、その見通しを持って研究活動に望んだ学生にとっては大いに参考になったようである。友人との共同研究にも意義を感じていた。

表9 研究活動の感想

授業を通して感じたこと	%
課題設定が難しかった	90
卒業研究に役に立つと思った	66
研究の仕方が分かった	85
自分に興味のあることをしたので楽しかった	78
活動するための時間が足らなかった	68
アンケート調査法が分かった	71
アンケート調査の項目に苦労した	78
アンケート調査の実施上の手続きが難しかった	75

友達と一緒に研究することができて楽しかった	68
社会に目を向けることの大切さを知った	45
発表（プレゼン）の仕方が分かった	52
研究内容をまとめるのに苦労した	63

### V. まとめ

現在の大学生の日常生活を見ると、情報化社会の波に乗り、テレビ番組などの既製品としての情報をそのまま受身的に取り入れることに慣れている。そのため、学習の場面でも疑問視したり、一つの課題として捉えるような学習になっていない。学校や教師が準備した学習課題（問題）にはそれほどの抵抗も感じられないが、自らが課題を作り出すことには相当のエネルギーを要することも判明した。研究テーマの設定に労を要したことは日常の生活において、社会事象に対しての関心が低く、課題として捉えることが出来ても、疑問視してみるということが習慣化していないためであろう。したがって、教職教育科目の授業全体を通して、マスコミ等で取り上げられている教育問題を授業の導入に活用して、教育に対する関心を誘起するような手立てを講じることも考えなければならないだろう。また、大学においても、講義式の授業の改善策として、事前に課題を提示しておき、そのことについて次の時間にディスカッションをする時間を設定し、演習形態を取り入れ、自発的に授業に参加する姿勢づくりをしていくことが、教師としての資質・能力を高めていくことにつながるのではないだろうか。

また、本研究の授業実践に関して述べれば、前年度の学生は高等学校の在籍時に総合学習の体験が少ないため、他の学校で実践されている研究主題の例を数多く紹介したが、例として研究主題を示すと、ヒントとなる反面、例題がそれぞれの認識枠として固定化し、研究主題の広がり期待できないというマイナス面が出てきた。その点、前述したように学習経験があると、以前友達が研究した内容に興味を覚えれば、今度は自分も研究してみようとする波及効果も現れてくる。その点で、課題を自分の力で設定するようである。次年度からの学生はさらにこれまでの学習経験が豊富にな



ることが考えられるので、その学習経験を考慮しながら、さらに発展した課題が設定できるような計画を立て、学生の自主的な学習が出来るようにしていかなければならないだろう。

## VI. 総合演習に関わる当面の課題

平成 10 (1998) 年の学習指導要領の改訂は「生きる力」の育成を目標としており、とりわけ社会に存在する課題を主体的に受け止め、創造的に解決していくための資質能力を養うことを付加している。その時の中心的な位置づけが総合学習であるが、実際に教育現場においては小学校・中学校・高等学校と進むにつれて、その実施率は低くなっている。特に高等学校ではいまだに十分に実施されていない<sup>(3)</sup>との見方もあり、そのことは本科目の受講者が高等学校で学習経験があまりない状況からも言えるのではないだろうか。

授業実践上の課題としては、活動する時間が少ないことと、時間外に活動することを奨励しても、研究班員のスケジュールが合わず、結局は本時の時間だけの活動になった。出来れば、例えば教育問題であれば、学校現場に出向いて、実際に現場の教師からのインタビュー等を通して、データの収集にあたり、教育という諸々の生の事象を肌で感じるこ

も、将来の教師を目指す学生にとっては重要なことである。研究発表会でのプレゼンテーションについても時間不足が感じられ、時間を多く費やして活動し、成果を出したのにも関わらず、発表の時間が少なく、十分に討論が出来ず、発表内容を聞く学生にとっては未消化の部分も出てきた。授業実践によって、このような課題が明らかになった。

### 【引用文献】

- (1) 中留武昭『総合的な学習・成功のカギ』ぎょうせい、2002年、p. 25
- (2) 亀井浩明他『中教審答申から読む 21 世紀の教育』ぎょうせい、2000年、p. 68
- (3) 熱海則夫 雑誌『悠』3月号 2007 P. 21

### 【参考文献】

- 中留武昭 「学校経営の改革戦略」玉川大学出版部 2000
- 中留武昭 「学校改善ストラテジー」東洋館出版社 1993
- 中留武昭 「総合学習のカリキュラム」九州大学出版部 2000